



Title	中央アジア絨毯の博物館コレクションの形成過程と呼称の変遷：貿易品目からエスニシティ分類へ
Author(s)	志田, 夏美
Citation	日本中央アジア学会報, 20, 40-56
Issue Date	2024-11-30
DOI	https://doi.org/10.14943/jacas.20.40
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/98886
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/
Type	journal article
File Information	JB20_003shida.pdf



中央アジア絨毯の博物館コレクションの 形成過程と呼称の変遷

—— 貿易品目からエスニシティ分類へ ——

志田 夏美

はじめに

19世紀末から20世紀にかけて徐々に定住生活様式を受容していった中央アジアの牧畜民の間には、定住生活への移行後もなお遊牧的な伝統が残っているといわれる。その代表例の1つに絨毯製品をあげることができる。それは遊牧民の伝統的な住まいを実用的かつ装飾的に構成する物質文化であった。この約1世紀の社会変動とともに、中央アジアの人々をとりまく生活も大きく様変わりしたが、絨毯製品はけっして過去の遺物ではなく、現代の彼らの生活にも欠くことのできない物質文化でありつづけている。

筆者は、かつての遊牧部族集団の末裔の間に残る絨毯作りという営みに着目することで、現代のウズベキスタンの住民の間に存在する遊牧的な文化や伝統に光をあてたいと考えている。そこで本稿では、これまで中央アジア絨毯がどのように研究されてきたのかを考察するために、標本資料の所在とその体系化の過程を明らかにし、各コレクションの分析を試みる。具体的には、現存する博物館コレクションの収集と体系化に貢献した2人の研究者に焦点をあて、その収集調査の目的や踏査地を明らかにする。さらに、中央アジア絨毯の流通網と呼称の対応関係から、それぞれの博物館コレクションの標本の生産地や作り手のエスニシティを推定する。

本稿では、次の3つを一次資料とする。うち2つは、帝政期に収集調査を実施した S. M. Dudin の著作で、「中央アジアの絨毯製品 (Kovrovye izdeliya Srednei Azii)」と題する論文 [Dudin 1928] と、『1900–1902年における中央アジア出張に関する S. M. Dudin の報告書 (Otchet S. M. Dudina o poezdakh v Srednyuyu Aziyu v 1900–1902 gg.)』 [Dudin 2021] である。後者は、ロシア人類学・民族学博物館 (Rossiiskii etnograficheskii muzei) 保管の手稿の報告書 (1903年提出) を同博物館の T. G. Emel'yanenko がテキスト補完および注釈を加筆し近年刊行した書籍である。残る1つは、ソ連期に数度の収集調査に従事した V. G. Moshkova の著作で、『19

世紀おわりから 20 世紀はじめの中央アジアの人々の絨毯 (Kovry narodov Srednei Azii kontsa XIX – nachala XX vv.)』と題する書籍 [Moshkova 1970] である。これは、博士論文の執筆途中に病没してしまった著者に代わって、その学術的草稿を保管していたウズベク・ソヴィエト社会主義共和国科学アカデミー歴史・考古学研究所 (Institut istorii i arkheologii AN UzSSR、以後「ソヴィエト社会主義」は省略して表記する) より刊行されたものである⁽¹⁾。

I. 中央アジア絨毯研究とロシア社会

まず、中央アジア絨毯とはどのようなものを指すのか。本稿で扱う用語の範囲を明らかにしておこう。中央アジアの遊牧民は、日常使いの敷物以外にも大小さまざまな用途の袋物や家畜用毛布、天幕の帯類など、身の回りの生活用品を絨毯製品によって賄ってきた。その製法には、大別すると、パイル(vorsovye)、平織り (gladkotkanye)⁽²⁾、刺繍 (vyshitye)、フェルト (koshma) があり、1つの製品に2つ以上の技法が用いられることも少なくなかった。原料には、主に羊毛が使用された。本稿における「絨毯 (kovry)」という用語は、その用途や形状、技法、素材の如何に関わらず、広い意味で用いられる。ただし、本稿の一次資料の原著者が区別して用いている場合はこの限りではない。手織り絨毯の主な生産地は、イラン、アナトリア(トルコ)、コーカサス、中央アジア、東トルキスタンである。中央アジアの地域概念と同様に、中央アジア絨毯の指す範囲も一律ではない。というのも、「中央アジア絨毯」という用語には、旧ソ連領中央アジア 5 か国で作られた製品以外に、アフガニスタン北部や東トルキスタンで作られた製品も含まれることがあるからである。本稿においては、資料の性質上、主に旧ソ連領中央アジア 5 か国産のものを対象とするが、時にその周辺地域の製品についても言及することがある。

次に、中央アジア絨毯研究の大まかな流れについてふれておこう。中央アジア絨毯はどのような社会背景のもとに研究対象となってきたのか。以下は、Moshkova による研究史の要約である。すなわち、中央アジア諸民族の絨毯織りに関する研究は 19 世紀半ばからはじまった。当初の資料としては、旅人や商人、中央アジアのロシア外交使節団の成員、軍事遠征の関係者の短い報告やメモがあった。その当時、絨毯を生産地域や芸術様式によって分類した目録がつくられたが、時に矛盾すら生じるほどの誤りがあった [Moshkova 1970: 12]。中央

(1) いずれの著作も原文はロシア語で、管見の限り、志田 [2022] と宗野 [2015] による Moshkova [1970] の抄訳以外に日本語訳は発表されていない。引用にあたっては筆者がロシア語から直接日本語に訳した。現地語の表記については、ロシア語使用者がキリル文字で表記したものを、筆者が『中央ユーラシアを知る事典』の「翻字・アルファベット表」[小松ほか編 2005: 592–593] に則ってラテン文字に転写し、さらにカタカナに置き換えた。そのため現地語の発音とは異なるものがある点を断っておく。

(2) 平織りは「パイルなしの絨毯 (besvorsovye kovry)」または現地語の「パラス (palas)」という用語でもしばしば表現される。これは、オリエント絨毯研究で一般的に用いられるトルコ語の「キリム (kilim)」に対応するものである。

アジア併合の後、帝政ロシアの研究者によって、この地域の民族の歴史や生業に関する研究がはじまった。専門調査の資料に基づく詳細な情報が印刷物として出版されるようになると、なかでも民族手工芸はロシア社会から高い注目を集めた。現地の地方行政とロシア中央当局は、ロシアの商業的・工業的資金力を示すために積極的に文献を出版し、様々な展覧会を催した。このような背景のもとに、19世紀おわりから民族手工芸と住民の生業（経済）の専門調査がはじまったのである [Moshkova 1970: 12–13]。ロシア 10 月革命を機に、民族手工芸の組織形態と調査の拠点にも変容が生じた。中央アジア諸国における民族政策の実施は、民族 (natsiya) 文化全般への特別な関心を引き起こし、すべての民族共和国において国立および公共組織による民族手工芸の研究がはじまった。ソヴィエト期の手工芸研究で着手された主要な課題は、生産の現代的状況を示すことにあった [Moshkova 1970: 14–15]。

以上から、少なくとも旧ソ連領中央アジア 5 か国産の絨毯を対象とする研究は、つまるところロシアと中央アジアの関係史のなかで進展してきたものであることがわかる。中央アジアがロシアに組み込まれはじめた帝政期の初期から中後期、ソ連期へと 3 つの時代的変遷とともに研究が本格化していった様子が窺える。次章以降では、中央アジア絨毯の呼称と分類法に着目しつつ、この 3 つの流れに沿うかたちで研究の変遷を追っていこう。

II. 絨毯貿易における識別

ソ連期の民族学者 Moshkova [1970: 13–14] は、最初期の分類に「誤り」がみられた要因について概ね次のように指摘する。すなわち、扱われた絨毯製品がすべて正確に検証された付帯情報 (pasport)⁽³⁾ を持っていたわけではなく、おおよその類型的特点によって特定されることが多かったからである。当時の研究者たちは直接、絨毯が生産されている場所へは行かず、転売業者や商人、その他「絨毯専門家 (kovrovye spetsialisty)」の手に渡った絨毯資料を使わざるを得なかったのだ。

要するに、商人などから二次的に取得した標本資料の情報は、実際の生産地や作り手の情報を反映するものではなく、そのせいで当時の分類には「誤り」が生じたと Moshkova は認識していた。それでは、その二次的な情報とは一体どのようなものだったのか。

Moshkova [1970: 23] によると、ロシアに比べてオリエント絨毯研究がすすんでいた西ヨーロッパの学者たちの間では 19 世紀末まで、中央アジア産の絨毯はすべて「中央アジア遊牧民の絨毯」と呼ばれ「小アジア群」に属していた。そのような状況下で、絨毯貿易の発展により「貿易 (torgovaya)」分類が明確化した。ただし、この分類は当事者間で取り決められたもので、

(3) 原語の pasport は、標本資料ごとに生産者や生産地等の情報を記録した資料カードのようなものを指すと思われる。博物館学においては、そのような標本とともに登録された情報を「付帯情報」とよぶため、本稿ではやや意識的にこの語を用いる。

ロシアの絨毯市場とヨーロッパの貿易慣行により、中央アジア絨毯は「ブハラ(bukharskie)」、「テキン(tekinskie)」、「カシュガル(kashgarskie)」の3つのグループに分けられていた。これらの呼称の原則に関して、Dudin [1928: 90-91] は次のような見解を述べている。

カスピ海からコーカサスを経由するペルシア絨毯と区別して、オレンブルグを経由してロシアに流通する中央アジア絨毯をすべて「ブハラ」と呼んだ。……中略……トルクメン絨毯の特徴が研究され、その品質が知れわたると一般的なグループと区別されるようになった。

つまり、オレンブルグ経由の絨毯は、生産者の別にかかわらず「ブハラ」という貿易品目でロシアに流通し、そのうち品質的に優れたもののみがトルクメン絨毯と認識されるようになったようである。

では、そもそもなぜ「ブハラ」という呼称になったのか。Moshkova [1970: 47-48] によれば、それは絨毯貿易におけるウズベキスタンの都市の重要性と関係している。

〔牧畜民家庭の〕地元の小規模な絨毯生産では、おびただしい数の都市部や農村部の住民の絨毯製品の需要を満たすことはできず、それゆえにウズベキスタンは常に輸入絨毯の大消費国であった。ウズベキスタンの領土は、中心部に位置し、主要な貿易ルートが横断しているおかげで、トルクメニアや東トルキスタン、アフガニスタン北部で生産された様々な絨毯製品が輸入されていた。このため、ウズベキスタンのいくつかの都市(旧トルキスタン地方の都市) コーカンド、アンディジャン、サマルカンド、そして旧ブハラ・ハン国の (byvsh. Bukharskogo khanstva) 首都ブハラは、20世紀初頭には、地元商人やロシア商人が外国商社と取引を行う中央アジア絨毯貿易の主要拠点となっていた。

つまり、貿易分類における「ブハラ」という呼称は、絨毯バザールが位置する都市名ないしブハラ・アミール国(上掲引用文中の「ブハラ・ハン国」)の名に由来すると解釈できる。後述するが、「ブハラ」絨毯にはブハラ・アミール国領域内で作られた製品を多く含んでいたため、国名に由来すると解しても誤りではないが、他の貿易品目の適用法則に鑑みると都市名に由来すると考えるのが妥当である。この見解は、Moshkova [1970: 23-24] も示唆しているところである。

貿易の拡大とともに「サマルカンド(samarkandskie)」や「アンディジャン(andizhanskie)」といった新しい製品群が登場し、区別されるようになった。これらの製品群の割り当ては、「ブハラ」と同じく、当事者間で取り決められたもので、絨毯の産地や種類ではなく販売場所による定義に基づいていた。

また、同じく Moshkova [1970: 23] によれば、19世紀から20世紀初頭にはすでにブハラとその近郊では絨毯製品は生産されていなかった。したがって、「ブハラ」絨毯を都市ブハラ産の製品と解するのは誤りである。

では、「カシュガル」の場合はどうだろうか。東トルキスタンでの調査旅行中に観察した製品について、Dudin [2021: 116] は次のように述べている。

ロシア国境へ大量に輸出されているのは、毛織物のパラス、フェルト、絨毯である。これらの製品は、カシュガルで生産されるのではなく、ホータン(Khotane)やアクス(Aksu)から運ばれてくる。

ここでもカシュガルは生産地ではなく、あくまで各地方の絨毯製品の集積地であることが示唆されている。つまり、貿易分類における「カシュガル」という呼称は、商人が取引を行う絨毯バザールが位置する都市名に由来すると考えていいだろう。

一方、「テキン」という貿易品目だけは地名ではない。これはトルクメンの部族の名に由来するもので、総称的にトルクメン絨毯を指したようである⁽⁴⁾。ただし、この貿易品目の「テキン」が指す範囲は、現在知られているところのトルクメン諸部族をすべてカバーしたわけではなく、品質やデザインによっては含まれないものもあったようだ。これに関しては、以下の Dudin [1928: 91] の記述が参考になる。

トルクメン部族のキジラヤク(kizilayakskii)とバシル(bashirskii)の絨毯が「ブハラ」と呼ばれたのは、品質的にトルクメンのものよりもウズベクのものに近いからである。キジラヤクとバシルの絨毯がロシアの市場に出回るようになったのは、昔も今もブハラ経由であり、トルクメン絨毯の多くはブハラを迂回するため、私の誤解でなければ、これらの絨毯がロシアに出回るようになったのはかなり後のことである。ヨムド(iomud)やオグルジャリン(ogurdzhalin)から先に入ってきた絨毯は、その〔芸術様式的〕特殊性から、しばしば商人によってコーカサス絨毯と分類されていた。

ここに述べられているように、キジラヤクとバシルの絨毯がブハラを経由して輸出されていた事実は、ともすればブハラを経由するか否かがトルクメン諸部族の製品の扱いのちがいを生んでいるようにも読める。しかし、Dudin [1928: 91] によれば、ブハラやサマルカンドの地元の目利きや商人の間でも、キジラヤクとバシルの絨毯はウズベク絨毯とみなされていたという。したがって、すでに Dudin が述べているように、流通経路の他に品質やデザインに

(4) なぜ他の部族名ではなくテキンであったのかについては筆者が用いた文献からは明らかでない。これに関しては、稿を改めて考察したい。

よる識別もまた同時に存在していたと捉えるべきだろう。

以上の内容をまとめると次のようなことが言える。貿易分類の呼称は、地名と部族名のどちらかに由来した。後者にあたるのはトルクメン諸部族の絨毯を指す「テキン」で、これは品質を基準とする分類であった。そのため、一部のトルクメン諸部族の製品はこれに含まれなかった。その他の貿易品目名は、ロシア商人が取引を行う貿易拠点すなわち絨毯バザールの位置する都市名に由来するものだった。

Ⅲ. 標本収集活動の目的と踏査地

以上のような輸出品からの不確かな情報は、当該分野の研究者たちの間に混乱を招いた。そうした状況下で、中央アジア絨毯を科学的に分類し直すことが試みられるようになる。

科学的分類の考案には、中央アジアの民族や部族集団に関する研究とも深く結びついていた。以下は、そのことを示す Moshkova [1970: 23] の要約である。すなわち、絨毯作りを生産地で直接調査した研究者たちは皆、中央アジアの人々の製品の技術や装飾が狭い部族的性格を有すると指摘している。科学者たちは、作品の芸術的外観の特徴により、作り手の民族的または部族的所属を決め、その出自に基づいて中央アジア絨毯を分類することを提唱した。このような特徴による分類は、古い絨毯標本の付帯情報がないこと、いくつかの地域では絨毯作りが衰退あるいは全面的に終了しているせいでその補填が不可能なこと、絨毯を作っている中央アジアの人々の個々の民族や部族集団に関する研究がほとんど行われていないことなど、入手可能なデータが不十分なためにかかなりの困難を伴っていた。絨毯を科学的に分類することが可能になったのは 20 世紀初頭のことで、その独自の芸術的伝統の担い手である作り手の出自から、個々の絨毯群の典型的な特性を導き出せるようになった。

なかでも後述する帝政期のロシア人民族学者 Dudin の現地調査と標本収集は、比較的正確な情報をロシア社会にもたらし、科学的分類の礎を築くことになった。彼が収集した博物館標本をもとに絨毯に描かれるデザインの抽出と類型化がすすむようになり、最終的にソ連期の民族学者 Moshkova が自身の現地調査の成果をふまえて中央アジア絨毯の作り手についてエスニシティ別に体系化していくこととなる。それでは、その科学的分類に寄与することになった現地調査とはどのようなものだったのか。収集の目的や対象、踏査地について具体的にみてみよう。

1. 帝政期

S. M. Dudin (1863–1929) は、ウクライナ生まれのロシア人民族学者である [Prishshepova 2011: 611]。報告書の序文を書いた Emel'yanenko [2021: 13–14] によれば、彼は 1900–02 年の

出張の前にすでに中央アジアでの現地調査を経験していた⁽⁵⁾。彼にとって最初の民族学的経験は1891年、V. V. Radlov (1837–1918) 率いるオルホン溪谷へのモンゴル探検隊の一員としてであった。続いて1893年に V. V. Bartol'd (1869–1930) の中央アジア旅行に同行し、1895–99年には N. I. Veselovskii (1848–1918) 率いるトルキスタンの古代遺跡を調査する歴史・建築探検隊に写真家として参加していた。

1900–02年の調査旅行は、当時ロシア帝国の首都サンクトペテルブルクに建設された新しい民族学博物館の最初の調査であると同時に、ロシアで初めての目的をもった民族学的調査でもあった。皇帝アレクサンドル3世ロシア博物館 (Russkii muzei imperatora Aleksandra III) の民族学部門⁽⁶⁾は、P. P. Semenov (1827–1914) や Bartol'd などの著名な歴史学者や考古学者、東洋学者、民族学者によって設立されたものであり、彼らは、伝統的な文化の現物資料を収集・保存することで、ロシア帝国の各民族の「民族の肖像 (etnicheskii portret)」を作成することを任務としていた。そのため、民族学的調査の際には現地の人々から資料を収集し、最も完全で信頼できる情報を得ることが優先された。中央アジアが博物館探検プログラムの最初に取り上げられたのは偶然ではなく、ごく最近になってロシアに編入された住民の文化を知ること、政策上の国家的要求と中央アジア地域の民族学部門の仕事を監督するロシア東洋学の学術的利益の両方を満たすものであった。館長 Radlov の発案で、専門の「収集者 (kollektor)」⁽⁷⁾を派遣することが決まり、その最初の人物に Dudin が選ばれた [Emel'yanenko 2021: 13]。

報告書の内容から、1900–02年の中央アジア出張は3回にわたって実施されたことがわかる。その経緯は次のようだった。1回目の出張は、ロシア・トルキスタンの「サルト (sart)」⁽⁸⁾の民族誌学的コレクションの収集を目的に実施されたものだった。彼は、1900年の冬にサ

(5) ここで紹介している調査以外にも、Dudin は主に写真家として数々の遠征調査に参加している。詳しくは、Prishshepova [2011] を参照のこと。

(6) 現在のロシア人類学・民族学博物館の前身にあたる。

(7) Emel'yanenko [Dudin 2021: 36 (注5)] によれば、当時の博物館において「収集者」とは、遠征業務を含めて博物館の展示品一式を入手する任務を担う職員のことであった。

(8) Emel'yanenko [2021: 16–17] によると、報告書において Dudin は、当時採用されていた用語に従って、中央アジアのマールワール・アンナフルの定住民を「サルト」と呼んでいる。この用語の起源と使用についてはいまだ明確な見解はないが、中世初期には、遊牧民は民族や言語のちがいに関係なくオアシスの住民をサルトと呼んでいたと考えられている。彼は、Bartol'd や他の学者の立場を踏襲して、現代の民族学で「定住ウズベク (osedlye uzbeki)」と「平地タジク (ravninnnye tadzhiki)」と呼んでいる文化的伝統の近い両言語集団に対してサルトの語を用いている。さらに報告書では、東トルキスタン・カシュガルのオアシスの都市民のことをサルトあるいは「カシュガルリク (kashgarlyki)」と呼んでいる (地元住民の間で使われてきた「ウイグル (uigury)」という用語は避けている)。つまり、Dudin の記述におけるサルトという用語は、異なる起源を持つ人々に適用され、エスニシティの枠を超えた呼称として登場している。一方、報告書における「ウズベク」という用語は、15世紀から16世紀にかけてキプチャク草原からマールワール・アンナフルにやってきたテュルク系諸部族の末裔に属し、20世紀初頭になってもなお遊牧や半遊牧の生活様式を維持している集団のみに用いている。また「タジク」という用語は、かつてブハラ・アミール国でブハラ高原と呼ばれた、現代のタジキスタンの山岳地帯の住民、すなわち「山岳タジク (gornyi tadzhiki)」にのみ用いている。

シクトペテルブルグを出発し、サマルカンドのバザールからそう遠くない土着の町に定住し、バザールの商人や工房の職人、ガラクタ商などから目当てのものを手に入れていった。他に、ブハラ、タシュケント、ホジェント (Khodzhent)、コーカンド、マルゲラン (Margelan)、ウルグト (Urgut)、そして上記都市間にある農村 (kishlak) を訪問し、入手できる資料の量に応じて各都市に5日から1か月滞在し、全部で約7か月間を過ごした [Dudin 2021: 32–35, 38–39; Emel'yanenko 2021: 18]。出張から戻ると、ロシア博物館の支配人 V. G. Mikhairovich 大公 (1863–1919) の命で収集品の展覧会を手配することになり、これが成功すると、今度は旅程に1～2ヵ国を加えることを条件に再び中央アジアに派遣されることが決まった。提出した旅程は、サマルカンドからアウリエ・アタ (Aulie-Ata)、ピシュペク (Pishpek)、トクマク (Tokmak)、イッスイク・クリ (Issyk-Kul)、カシュガルアルパ (Arpa) 渓谷を経由してタシュケントへ、カシュガルからイルケシュタム (Irkeshtam) を経由してアライの (Alaiskii) 渓谷へ、ブハラ・アミール国のブハラ高原 (Nagornaya Bukhara) の諸都市を経由してブハラとサマルカンドへ至るルートだった [Dudin 2021: 40]。しかし、2回目の出張では、現地にて旅程の変更が生じたため実際たどった経路はこれとは異なり、トルクメニア、ブハラ高原、東トルキスタン、アライ渓谷にて、トルクメンやサルト、山岳タジク、ウズベク、クルグズ (kara kirgizy) の標本収集が行われ、全部で約6か月間、現地に滞在した [Dudin 2021: 41–48, 99, 121, 123–125, 486–488; Emel'yanenko 2021: 18–19]。3回目の出張は、これまでの遠征の収集の漏れを補完することを目的に計画された。未踏査だったシルダリヤ付近でのカザフ (kirgizy) やクルグズの標本収集が優先され、さらにフェルガナ盆地やゼラフシャン盆地でもサルトやウズベクなどの標本収集が行われた [Dudin 2021: 532–550; Emel'yanenko 2021: 19–20]。

3回の調査旅行で収集した標本の総数は4875点にのぼった [Dudin 2021: 554–555]。彼はそれらをエスニシティおよび地域別に一覧化しており、その内容を表1にまとめた。エスニシティ別の内訳は明らかでないが、標本の種類としては、家具や台所用品、衣服、宝飾品、武器、馬具、楽器、玩具、喫煙具の他に、陶器や木彫り、皮革、テキスタイル (綿織物、絹織物、絨毯、フェルト、刺繍)、農耕、牧畜、仕立て屋、漁業、狩猟などの生業の道具や工芸品、その原料などが含まれる [Dudin 2021: 33–34]。Dudin は、新しいものよりも古いものの方が芸術的価値を有し、民族工芸の伝統をより忠実に反映していると考え、出張中に作られたものではなく可能な限り古いものを手に入れようとした [Emel'yanenko 2021: 24]。文献からは絨毯製品の具体的な点数は明らかでないが、遊牧民のもとではとりわけ絨毯製品が収集された。たとえば、トルクメンのもとでの収集に関して Dudin [2021: 45–46] は次のように記している。

表 1 S. M. Dudin の中央アジア出張の収集資料

所蔵機関	エスニシティ (地域)	標本点数
(現) ロシア人類学・民族学博物館	トルクメン	361
	サルト(カシュガル)	204
	サルト(サマルカンド)	1268
	サルト(ブハラ)	828
	サルト(フェルガナとシルダリヤ)	651
	山岳タジク(ブハラ高原)	86
	クルグズ(アライ、カシュガリヤ、シルダリヤ)	179
	ウズベク(サマルカンド、ブハラ)	148
	カザフ(サマルカンド州、シルダリヤ州)	104
	アフガン(サマルカンド)	79
	ペルシア/他の絨毯	18

Dudin [2021: 554-555] をもとに筆者作成

テキンやサルイクの物質的生活の品々の中で私が最も注目したのは、絨毯、刺繍、銀の宝飾品であった。……中略……買い付けは〔可動式住居〕ユルタでも行われ、そのために私はいくつかの牧村 (aul) に行き、すべてのユルタを訪ね歩き、(アシユハバードやメルヴの) バザールや絨毯の売買を行う専門店にも足を運んだ。当然、時間も場所も余裕のあるバザールや商店の方が豊富な収穫を与えてくれたことは理解に容易い。けれども、ユルタでの買い付けは、私にとってもっと重要な目的があった。絨毯の特徴やその装飾について、この分野の商人や地元の「専門家」がつけるその名称が同じように呼ばれているのか、その場で確認しておきたかったのだ。このような観点から、絨毯加工業に携わる何らかの指揮者のもと幾人もの織り手がいるような大きな工房には興味がなかったのは言うまでもない。というのも、そこではその土地の様式が失われて久しく、訪ねても混乱を招くだけだからだ。私は、絨毯作りが副業ですらなく、ただ家庭の需要を満たすためだけに、織機がたまにしか動かないような牧村に行くことを好んだ。……中略……私は、小さなサイズの絨毯だけを好んで買ったが、それは安いからでもあるし、展示した時に場所を取らないからでもある。大きな絨毯で重要性を感じた時は、値段が比較的安価な場合のみ、そのような標本を買ってもいいことにした。

ここでもふれられているように、遊牧民から直接入手する以外にも都市部のバザールから購入されることもあった。Dudin [2021: 37] によれば、その経緯は次のようなものだった。

買い付けをしていると、サルト製ではないものの、彼らが日常的に使っているものに度々出くわした。そのような物としては、ロシア製の他に、ペルシア製やアフガン製、インド製、トルクメン製、ウズベク製、カザフ製のものもあった。それらはほとんどすべて、

今も昔も生活に欠かせないものであり、自ら作ったものでもあった。私は、当初、ただ私の収集品によって描きだすサルトの物質文化に必要な構成要素として、これらの物を購入したが、その後、他民族の製品の多くは、いわばサルトの生産物の見本であるという、彼らの新たな一面が明らかになってきたので、それらも含めることにした。こういったわけで、ペルシアやアフガンの銅食器、トルクメンのテキンやウズベクの絨毯などが買われたのだ。

このように Dudin の収集品は、定住民と遊牧民の市場を介した文化的交流を体現するものでもあった。以上から、表1のトルクメン、ウズベク、カラカルパク、クルグズ、カザフの項目に示されている標本点数のうち、少なくない割合を絨毯製品が占めていると考えられる。

2. ソ連期

V. G. Moshkova (1902–1952) は、フェルガナ生まれのロシア人民族学者である。著書の序文を書いた Morozova [1970: 5] によれば、彼女は 1925 年に中央アジア (国立) 大学東洋学部を卒業後、一時的に民族手工芸の調査を行う手工芸組合で働き、そこで絨毯織りに魅せられたことをきっかけに中央アジア絨毯の研究に着手しはじめた。

Moshkova が従事した現地調査は全部で 6 つある。その目的や調査地は次の通りである。絨毯製品を対象とした最初の専門調査は、1929–30 年に、中央アジア (国立) 大学東洋学部 (vostfak SAGU) と中央アジア経済評議会 (Sredazekonomsovet) の「東方女性の労働および生活向上委員会 (Komissiya po uluchsheniyu truda i byta zhenshshin Vostoka (KUBT))」によって組織された。M. F. Gavrilov を責任者として、Morozova と Moshkova の他に画家 1 名が参加した。調査の目的は、中央アジアの手織り絨毯産業の範囲に関する資料を収集し、絨毯作りの技術や道具、モチーフの用語等について作り手から聞き取ることにあった。訪問先は、クルグズ共和国南部地域のオシュ・ジャララバード (Osh-Dzhalalabad) およびウズベク共和国のアンディジャン州ジャラルクドゥク (Dzhalalkudukskii) 地区とアラヴァンブリン (Aravanburinskii) 地区、サマルカンド州ザアミン (Zaaminskii) 地区とジザク (Dzhizakskii) 地区、カシュカダリヤ州カマシ (Kamashi) とジェナウ (Dzhenau)、トルクメニアのアムダリヤ地域のケルキ (Kerki) からチャルジョウ (Chardzhou) まで、中南部地域のメルヴ、パイラム・アリ (Bairam-Ali)、タフタ・バザル、サラフス (Sarakhsh)、テジェン (Tedzhen)、アシュハバード、バハルデン (Bakharden)、ギョク・テパ (Geok-tepa) であった [Moshkova 1970: 15]。

1935 年には、トルクメン共和国絨毯財団 (Kovrovyy fond TurkmSSR) および絨毯連盟 (Kovrovyy Soyuz TurkmSSR) によって、トルクメン諸部族を対象とした調査が行われた。2 つの調査隊が編まれ、Moshkova が隊長を務める第 1 次調査隊 (計 3 名) は、アムダリヤ中下流域左岸に

暮らすサロル(salor)やヨムド、その他のトルクメン部族の絨毯を収集するために、サヤト(Sayat)、デйнаウ(Deinau)、ダルガン・アタ(Dargan-ata)、タフタ(Takhta)、イリヤルイ(Il'yaly)、クンヤ・ウルゲンチ(Kunya-Urgench)、タシャウズ(Tashauz)の村や町にて調査を実施した。第1次調査隊にも参加していたV. L. Miramが隊長を務める第2次調査隊(計3名)は、カスピ海沿岸地域に暮らすヨムドに関する資料を収集するために、タルタ(Tarta)、アク・クユ(Ak-Kuyu)、シャトルイク(Shatlyk)、チェレケン(Cheleken)、ダリハ(Dal'kha)、オグルチンスク(Ogurchinsk)、シイフのグバ(Shiikhskaya guba)、ジェベル(Dzhebel)、ガッサン・クリ(Gassan-Kuli)にて調査を実施した[Moshkova 1970: 15–16]。

1940年にも同組織によって調査が行われた。構成員は、隊長のMoshkovaの他に学術協力者と画家が1名ずつであった。調査の目的は、ヨムドやチョウドル(choudor)の絨毯の収集で、対象地域はタシャウズ州であった[Moshkova 1970: 16]。

1942年のカラ・カル(Kara-Kal)への遠征旅行では、トルクメン部族のゴクレン(goklen)のもとを訪ねたが「ここではすでに[パイル]絨毯織りは途絶えていて、パラス製品が小規模に作られているのみであった」という記述以外に情報が無い[Moshkova 1970: 16]。

1944–46年には、ウズベク共和国科学アカデミー歴史・考古学研究所によって学術探検隊が組織され、サマルカンド州ヌラタ山間部にて絨毯作りを行うウズベクとウズベク・トゥルクマン部族(uzbeki plemeni turkman)の調査が行われた。ミタン(Mitanskii)、ヌラタ(Nuratinskii)、コシュラバード(Koshrabadskii)の地区にて前者の製品が調査され、ザルバンド(Zarband)、アク・テパ(Ak-tepa)、カラ・クドゥク(Kara-Kuduk)、サマリ(Samari)、プチャト(Pchat)、アルトイ・ベク(Alty-bek)、ボルガルイ(Bolgaly)の村々にて後者の製品の調査が行われた[Moshkova 1970: 16]。

1950–51年にも同研究所によって民族学遠征隊が組織された⁽⁹⁾。ウズベキスタンのナマンガ州パプ(Papskii)地区ハナバード(Khanabad)近郊の村々にて、キプチャク(kipchak)の絨毯生産に関する資料が収集された[Moshkova 1970: 16]。

以上の遠征調査で収集した標本資料は、基本的に派遣主体の機関が収蔵することになった。トルクメニスタンの領域で収集された資料は、トルクメン共和国の絨毯財団⁽¹⁰⁾と美術館(Muzei iskusstv Turkmenskoi SSR)に、ウズベキスタンの領域で収集された資料は、ウズベク

⁽⁹⁾ この遠征にはMoshkovaは従事していない可能性が高い。というのも、Morozova [1970: 5]も英訳者のO'Bannon 他 [1996: vii] も、彼女が「1929–46年に6つの専門調査を行った」と記しており、さらに彼女の没年は1952年だからである。しかし、そうすると従事した調査の数が合わないことになる。

⁽¹⁰⁾ Moshkova [1970: 16]によれば、財団の度々の改組や1948年のアシュハバード大地震のために大部分の標本は散失してしまった。また、O'Bannon 他 [1996: xi]によると、1995年に美術館と絨毯財団からトルクメニスタン国立絨毯博物館が設立されたらしい。したがって、表2に示したトルクメン共和国の標本のうち現存するものは、当該博物館が所蔵していると思われる。

表2 中央アジア諸国の所蔵先と収集時期の対応

所蔵機関	収集時期
トルクメン共和国絨毯財団	1929-30年 (20世紀半ば時点で散失)
トルクメン共和国美術館	1930年 1935年
ウズベク共和国美術館	1929年
ウズベキスタン民族歴史博物館	1929年 1929-30年 (トルクメン複製標本) 1928年ほか (歴史博物館専門調査隊による収集標本)
ウズベク歴史文化博物館	詳細不明
各共和国の郷土研究博物館	詳細不明

筆者作成

共和国の美術館 (Muzei iskusstv Uzbekskoi SSR) とウズベキスタン民族歴史博物館 (Muzei istorii narodov Uzbekistana)⁽¹¹⁾、在サマルカンド・ウズベク歴史文化博物館 (Muzei istorii kul'tury uzbekskogo) に収蔵された [Moshkova 1970: 16]。表2は、標本の収蔵機関と収集時期の対応を示したものである。それぞれの収集点数は不明だが、絨毯財団が収蔵していた500点ほどの標本資料を「大コレクション」と表現しているため、各調査隊の収集数はこれより少ないと考えられる。

収集品選びの基準については明らかでないが、O'Bannon 他による英訳本 [Moshkova 1996] には彼女が収集した標本の一部がカラー図版で掲載されている。それらをみる限り、ほとんどの標本は19世紀前半から20世紀初頭にかけて製作されたものであることがわかる。

また、Morozova [1970: 5] によれば、標本は資料集とともに保管されており、標本ごとに、生産地、作者の民族 (natsional'nosti) および部族的 (premennoi) 帰属、原料や技法、配色、デザイン、パターンに関する情報の記述、ならびに装飾モチーフの呼称に関する表記や絨毯デザインのスケッチや写真が付されているそうである。

Ⅳ. 流通網と生産地および作り手のエスニシティの対応関係

先述のように、中央アジア絨毯は「テキン」、「ブハラ」、「カシュガル」などの貿易品目で識別されていたが、この呼称は実際の生産地や作り手のエスニシティを反映したものではな

(11) 現在のウズベキスタン国立歴史博物館を指す。Moshkova [1970: 16] によれば、当該博物館には、1929-30年にウズベキスタンの領域内で収集した資料以外に、トルクメン共和国絨毯財団のコレクションの複製標本や歴史博物館の専門調査隊によってその他の時期に収集された標本も含まれる。後者には、たとえば Sh. I. Inogamov および M. A. Bikzhanova によるカシュカダリヤ州の半遊牧ウズベクを対象とした1928年の遠征、S. P. Rusyaikina によるスルハンダリヤ州のラカイ族を対象とした遠征、T. Mirgiyazov によるシルダリヤ地方に暮らすカザフを対象とした遠征などで収集されたものがある。



図1 絨毯の作り手と流通網

帝国書院白地図中央アジア・西アジアの一部を使用して筆者作成

かった。20世紀初頭、Dudinはロシア博物館の収集者として「現地の人々から資料を収集し、最も完全に信頼できる情報を得る」ために中央アジアへ出張し、その任務を完遂した。彼の持ち帰った標本資料と現地住民から得た情報は、博物館標本の分析研究を進展させ、後にMoshkovaが貿易品目名に対応する生産情報を解明する際にも役立てられた。図1は、その解明の結果として、中央アジア絨毯の流通網と生産地および作り手のエスニシティの対応関係を筆者が地図上に図示したものである。

それぞれの貿易品目名ごとの経由地や作り手のエスニシティをみてみよう。まず、「テキン」絨毯とは、クラスノヴォスク経由でロシアや国外に輸出された、ザカスピヤ(Zakaspiya)地域のトルクメン諸部族の生産品のことを指していた[Moshkova 1970: 23]。次に、「ブハラ」群にはブハラで作られたすべての絨毯が含まれていた⁽¹²⁾。ブハラ・アミール国とヒヴァ・ハン国の領域に暮らすトルクメン、ウズベク、アラブによって作られた絨毯製品もここに含まれた。本群には、ときにアフガン(afganskie)やパルーチ(beludzhskie)の絨毯も含まれることがあった[Moshkova 1970: 23]。後に台頭した「サマルカンド」絨毯は、サマルカンドの市場で調達された製品のことを指していた。本群には、半遊牧ウズベクや他の牧畜民族(カラカルパク、カザフ)の各部族のほかに、フェルガナ盆地のクルグズの生産品もしばしば含ま

⁽¹²⁾ ここでいうブハラは都市名ではなくブハラ・アミール国のような広域的概念と解釈すべきだろう。先述のように、貿易分類における「ブハラ」絨毯がブハラ・アミール国産の製品と解することを否定しなかった理由の一つはここにある。

れていた[Moshkova 1970: 24]。同じく「アンディジャン」群には、アンディジャンの貿易市場で購入された、主にフェルガナ盆地のクルグズによって作られた製品が含まれた。一部に、新疆で作られた製品も含まれていた[Moshkova 1970: 24]。一方、「カシュガル」絨毯は、主にカシュガルの絨毯市場で調達され、フェルガナ盆地を経由して輸出された、東トルキスタンの領域で作られた絨毯のことを指していた。アンディジャンで購入されたフェルガナ盆地のクルグズの絨毯も、しばしば間違って「カシュガル」絨毯と呼ばれていた[Moshkova 1970: 23]。

ここまでで明らかなように、フェルガナ盆地のクルグズの製品には、流通網の関係により「カシュガル」、「サマルカンド」、「アンディジャン」という複数の呼称が割り当てられていたようである。これは、貿易分類による呼称しか情報がない古い標本を、実際の生産地や作り手の情報に分類し直すことのむずかしさを示した顕著な例であると言える。

また、しばしば見受けられるカテゴリーを越えた重複は、貿易の発展とともに呼称が増加したことによって生じたものだと説明できる。先述の通り、貿易品目名の登場は「ブハラ」>「テキン」>「サマルカンド」と「アンディジャン」の順である。つまり、もともとの「ブハラ」にはすべての製品が含まれていたが、そのうち品質的に優れたものが「テキン」と呼ばれるようになり、さらに新しい貿易拠点の台頭によって「サマルカンド」や「アンディジャン」が区別されるようになったのである。

東トルキスタン産の生産地と作り手のエスニシティに関しては、Moshkovaの分析結果のみでは情報が不足しているため、Dudinの記述から補足してみよう。クルグズの製品との関連で「カシュガル」絨毯について Dudin [1928: 91] は次のように述べている。

クルグズ絨毯の一部は〔地元の〕商人に「マンガト(mangitskii)」と呼ばれていたが、中国トルキスタン西部のクルグズ遊牧民の製品は「カシュガル」という通称で取引されている。

同様にクルグズの製品について説明した箇所、Dudin [1928: 144] は東トルキスタンの生産地やエスニシティに関して次のように述べている。

1902年の中国領トルキスタン旅行では、絨毯の生産地を訪ねる時間がなかったので、カシュガル在住のロシア人 Pal'tsev 博士から聞いたことを報告することしかできない。彼によると、カシュガルから西トルキスタンの絨毯市場に供給される絨毯は、ホータン地区やアクスのクルグズと定住ウズベクが作ったものだという。

要するに、東トルキスタン産の絨毯製品の主な生産者はクルグズであったことがわかる。ま

た、引用文中の「定住ウズベク」は現在のウイグルに相当すると考えられる。したがって、「カシュガル」絨毯は次のように再定義できるだろう。すなわち、主にカシュガルの絨毯市場で調達され、フェルガナ盆地を経由して輸出された製品群で、主にホータンやアクスのクルグズとウイグルの製品が含まれ、一部に東トルキスタン西部やフェルガナ盆地のクルグズの製品も含まれていた。

V. 各国博物館コレクションの特性

以上みてきた内容をもとに、ロシアと中央アジアに分けて、その標本の収集年代や地域、作り手のエスニシティに関する情報をまとめ、そのコレクション全体がどのような性格を有しているのかについて考えてみよう。

ロシア人類学・民族学博物館の Dudin が収集した中央アジアコレクションの絨毯標本は、1900年から1902年に収集されたもので、遊牧民の牧村や農村から直接購入したものと都市部のバザールから購入したものから成る。収集地域は、現在のトルクメニスタンのアシュハバードやメルヴ周辺、ウズベキスタンのサマルカンドやブハラ、フェルガナ盆地の諸都市、ウズベキスタンおよびタジキスタン南部の山岳地帯、クルグズスタンのアライ渓谷、クルグズスタン西部とカザフスタン南西部の渓谷地帯、カザフスタンのシルダリヤ付近、中国新疆ウイグル自治区内の諸都市である。エスニシティ別にみると、トルクメン、ウズベク、カラカルパク、カザフ、クルグズ、アフガン、その他ベルシアの製品を含んでいる。

中央アジア諸国の博物館の Moshkova が筆頭となって収集した絨毯コレクションは、主に1929年から1951年の間に絨毯生産者から直接収集されたものである。収集地域は、現在のクルグズスタンおよびウズベキスタンの領域にまたがるフェルガナ盆地、ウズベキスタンのサマルカンド州およびカシュカダリヤ州、トルクメニスタンのアムダリヤ中下流域とカスピ海沿岸地域である。エスニシティ別にみると、トルクメン、ウズベク、クルグズ、アラブ、カラカルパク、カザフの製品を含んでいる。収集地域に応じて同国の機関が収蔵したため、トルクメニスタンのコレクションはトルクメン諸部族の製品から成り、ウズベキスタンのコレクションはウズベクやクルグズ、アラブ、カラカルパク、カザフなどの製品から成る。また後者には災害等で散逸してしまったトルクメン諸部族の複製標本も含まれる。

帝政期とソ連期の収集活動をふまえて各国のコレクションを比べてみると、後者は絨毯作りの専門調査によって、生産者から直接見聞きした仔細な付帯情報をもつ点で価値ある資料群であることは間違いない。その反面、前者はバザールから入手した標本を多く含み、1つ1つの付帯情報の精度や量という観点では見劣りするかもしれない。しかし、コレクション全体の生産地やエスニシティという観点からみると、東トルキスタン産の製品や周辺諸国か

らの輸入品も含むので非常に幅広いラインナップで構成されている。さらに、バザールの流通品をできるだけ忠実に反映しているため、当時の中央アジアの住民の暮らしを知る上で高い学術的価値を有する資料群であると言える。一方、中央アジア諸国の方は、コレクションを領域に応じて各国の所蔵機関に配分しているため、当時の住民の生活の全体像を再現することは難しいかもしれない。しかし、かえってその領域主義的な配分のおかげで、その共和国内に暮らす住民のエスニシティを端的に示す資料群となりえている。とりわけウズベキスタンのコレクションは、その領域内に暮らす人々の多様なエスニシティを反映するものであると言えるだろう。

おわりに

本稿で示されたように、中央アジア絨毯研究は、ロシアとの関係を背景に進展してきたものであった。当初、中央アジア絨毯は、ヨーロッパ・ロシアの貿易慣行にしたがって、「ブハラ」や「カシュガル」といったロシア商人が取引を行う絨毯バザールの都市名で呼び分けられていた。中央アジアのみならず隣国からの流通品も集まるブハラの絨毯バザールは貿易の一大拠点であり、そのため「ブハラ」絨毯にはあらゆる産地の製品が含まれていた。やがてロシア商人たちは、品質的に優れたトルクメン諸部族の製品を「テキン」という名で区別するようになり、さらに新しい貿易拠点の「サマルカンド」や「アンディジャン」といった識別も生んでいった。

中央アジアの民族や部族集団に対しては、ロシア帝国からソ連へと政権がうつっても、統治・学術の両面から関心が寄せられつづけた。中央アジア絨毯の科学的分類の試みもその一環だった。とりわけロシア人民族学者 Dudin の現地調査と標本収集は、比較的正確な情報をロシア社会にもたらし、科学的分類の礎を築いた。ロシア博物館標本を中心に、絨毯に描かれるデザインの抽出と類型化がすすみ、それらを最終的に Moshkova が自身の現地調査の成果をふまえてエスニシティ別に体系化した。言い換えると、中央アジアの絨毯と民族部族集団の研究は、ロシア語社会のフィルターを通して開拓され、蓄積されてきたものと言える。

ところで、今日も一般的なこの科学的分類——エスニシティ別分類——は、実際の作り手のアイデンティティを反映したものなのかどうか筆者は疑問に感じている。絨毯に描かれるデザイン要素の抽出と系統立ては、中央アジアの牧畜民の部族構成を裏付ける証左でもあったが、その記号の抽出とエスニシティの同定という作業は循環参照を起こしているようにも思える。筆者は今後、ロシア語の学界で築き上げられてきたエスニシティの枠組みを問い直すことができればと考えている。そのために、まずは現地住民の生活に根ざした参与観察型の調査を行いながら、住民の言葉を学び、絨毯製品に投映される（あるいは反映されない）作

り手のアイデンティティのあり様を十分に理解することに努めたい。その上で、エスニシティ分類の構築にあたって参照されてきた標本資料を批判的に分析し直すことを展望している。

謝辞

本研究はJSPS 科研費 JP 22KJ1939 の助成を受けたものです。

参考文献

- Dudin, S. M. 1928. “Kovrovye izdeliya Srednei Azii,” *Sbornik Muzeia antropologii i etnografii* 7, pp. 71–166.
- . 2021. *Otchet S. M. Dudina o poezdках v Srednyuyu Aziyu v 1900–1902 gg.*, preparation of the text, introduction and notes by T. G. Emel'yanenko, Moscow: Fond Mardzhani.
- Emel'yanenko, T. G. 2021. “Otchet S. M. Dudina o poezdках v Srednyuyu Aziyu v 1900–1902 gg. Kak etnograficheskii istochnik,” in *Otchet S. M. Dudina o poezdках v Srednyuyu Aziyu v 1900–1902 gg.*, written by S. M. Dudin, preparation of the text, introduction and notes by T. G. Emel'yanenko, Moscow: Fond Mardzhani, pp. 13–31.
- 小松久男ほか編 2005 『中央ユーラシアを知る事典』 東京：平凡社。
- Morozova, A. S. 1970. “Predislovie,” in *Kovry narodov Srednei Azii kontsa XIX – nachala XX vv.*, written by V. G. Moshkova, Tashkent: Izdatel'stvo “FAN” UzSSR, pp. 5–6.
- Moshkova, V. G. 1970. *Kovry narodov Srednei Azii kontsa XIX – nachala XX vv.*, Tashkent: Izdatel'stvo “FAN” UzSSR.
- . 1996. *Carpets of the People of Central Asia of the Late XIX and XX Centuries*, translated & edited by G. W. O'Bannon & O. K. Amanova-Olsen, Tucson: G.W. O'Bannon.
- O'Bannon, G. W. & O. K. Amanova-Olsen 1996. “Editor's Introduction to the Translation,” in V. G. Moshkova *Carpets of the People of Central Asia of the Late XIX and XX Centuries*, translated & edited by G. W. O'Bannon & O. K. Amanova-Olsen, Tucson: G.W. O'Bannon.
- Prishshepova, V. A. 2011. “K 150-letiyu so dnya rozhdeniya S. M. Dudina: khudozhnika, etnografa (po materialam MAE RAN),” *Antropologicheskii Forum*, no. 15, pp. 608–649.
- 志田夏美 2022 「中央アジア絨毯に関する先行研究レビュー——『ウズベク絨毯』をめぐって——」『イスラーム世界研究』15: 254–270.
- 宗野ふもと 2015 「手織り物からみる女性の日常生活——ウズベキスタン牧畜地域の事例から——」京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科（未出版博士論文）。